

平城宮跡第231次発掘調査 現地説明会資料

(平城京左京三条一坊七坪の調査)

奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部
1992年3月7日

はじめに

今回の調査は、積水ハウス株式会社の美術館建設にともなう事前調査として、平城宮跡発掘調査部が行なった。調査面積約2800m。1月8日から調査を始め、現在継続中である。

当該地は平城京左京三条一坊七坪に当り、朱雀大路から東へ2坪目、二条大路から南へ2坪目である。南を三条々間路、東を東一坊々間路に画される。調査区は七坪の中央南よりに当たる。調査区東のマンション建設に先立ち、橿原考古学研究所が試掘調査を行ったが、遺構は検出されなかった。みやと通りをはさんだ東側で、昭和58年度に奈良市が行なった調査では、東一坊々間路西側溝が検出されている。

調査前、当該地は、積水ハウス株式会社の関連会社の倉庫・工場として使用されていた。そのため工場の機械設置や、倉庫上屋の基礎によると思われる攪乱が著しい。現地説明会用のテント設置場所と、周辺の深い穴はいずれも近年掘られたものである。

遺構

地山面上で、掘立柱建物10棟、井戸4基、土塋2基、道路状遺構2条などを検出した。重複関係によって2時期に区分される。なお今のところ井戸は掘り下げが完了しておらず、2時期のいずれに属するか不明である。

【1期】

建物4、5、7、8、10で構成される。中心となる建物は、調査区の東で検出された南に庇をもつ建物7である。掘形の一辺が1mを越え、柱間が

10尺等間となる大形の掘立柱建物。建物10はその西脇殿に相当する建物。桁行5間の東に庇の付く建物。建物4と8は、妻を揃えて南北に並ぶ。

【2期】

建物1、2、3、5、6、9で構成される。中心となる建物は、調査区の北東で検出された南に庇をもつ建物2である。桁行6間分を検出しており、全体で桁行7間になると推定される。建物1、3、6は、柱筋を揃えて建ち、1、3は西脇殿に相当する建物。

遺物

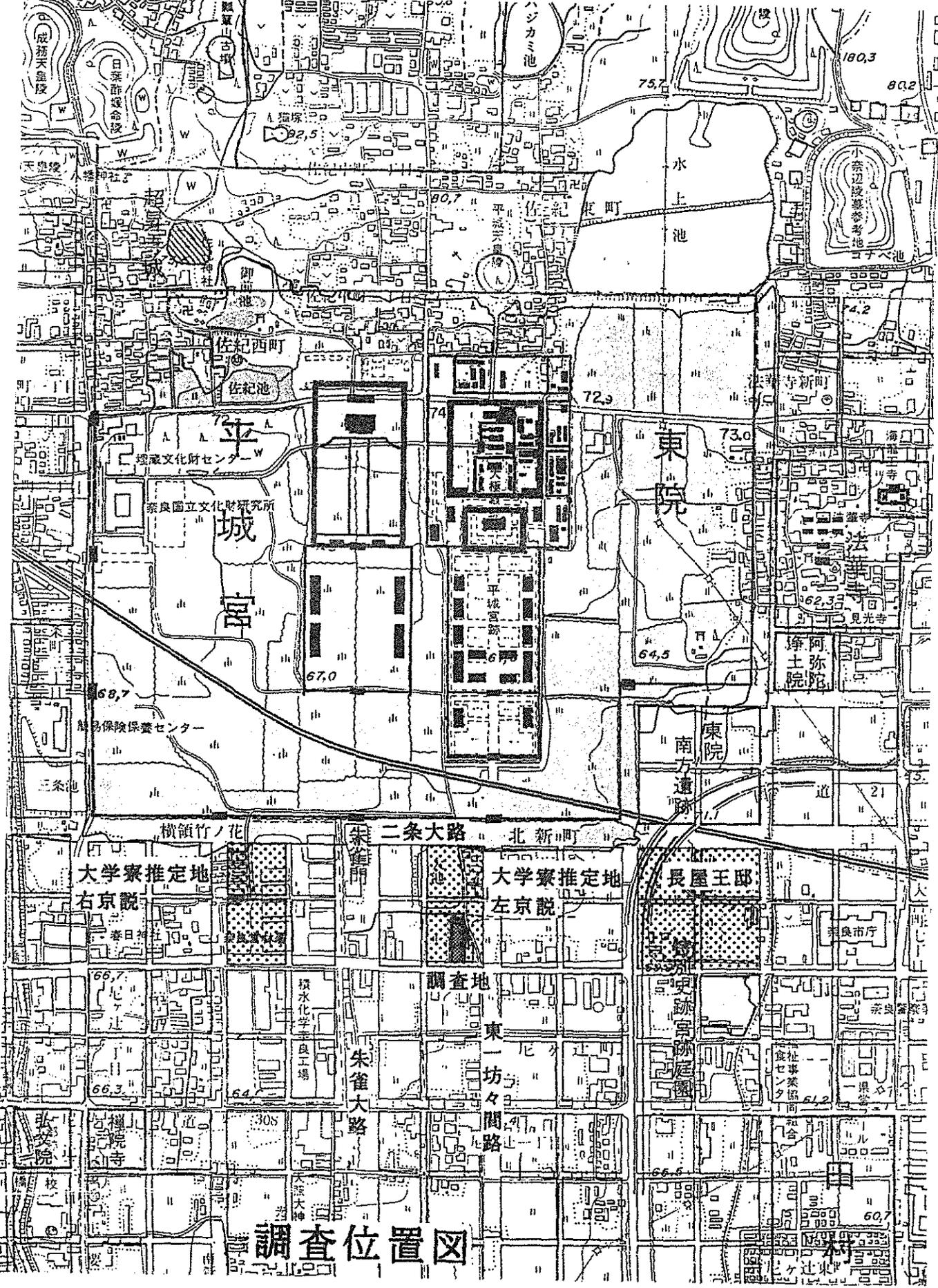
土塋15、16からは奈良時代に属する大量の土器が出土した。土塋15からは、愛知県猿投古窯産と推定される、貼花文と透かしをもつ火舎状土器が出土した。貼花文の技法は、唐の三彩の影響によるものであろう。文様自体も唐の金銀器に類例を見ることができる。この他愛知県猿投古窯産の壺などが一定量出土した。土塋底からは、大形の須恵器甕が数個体分まとまって出土した。土塋16からも須恵器甕が出土したほか、墨書土器「飯」「加」などが出土した。

瓦は少なく、軒丸瓦2点、軒平瓦1点が出土した。

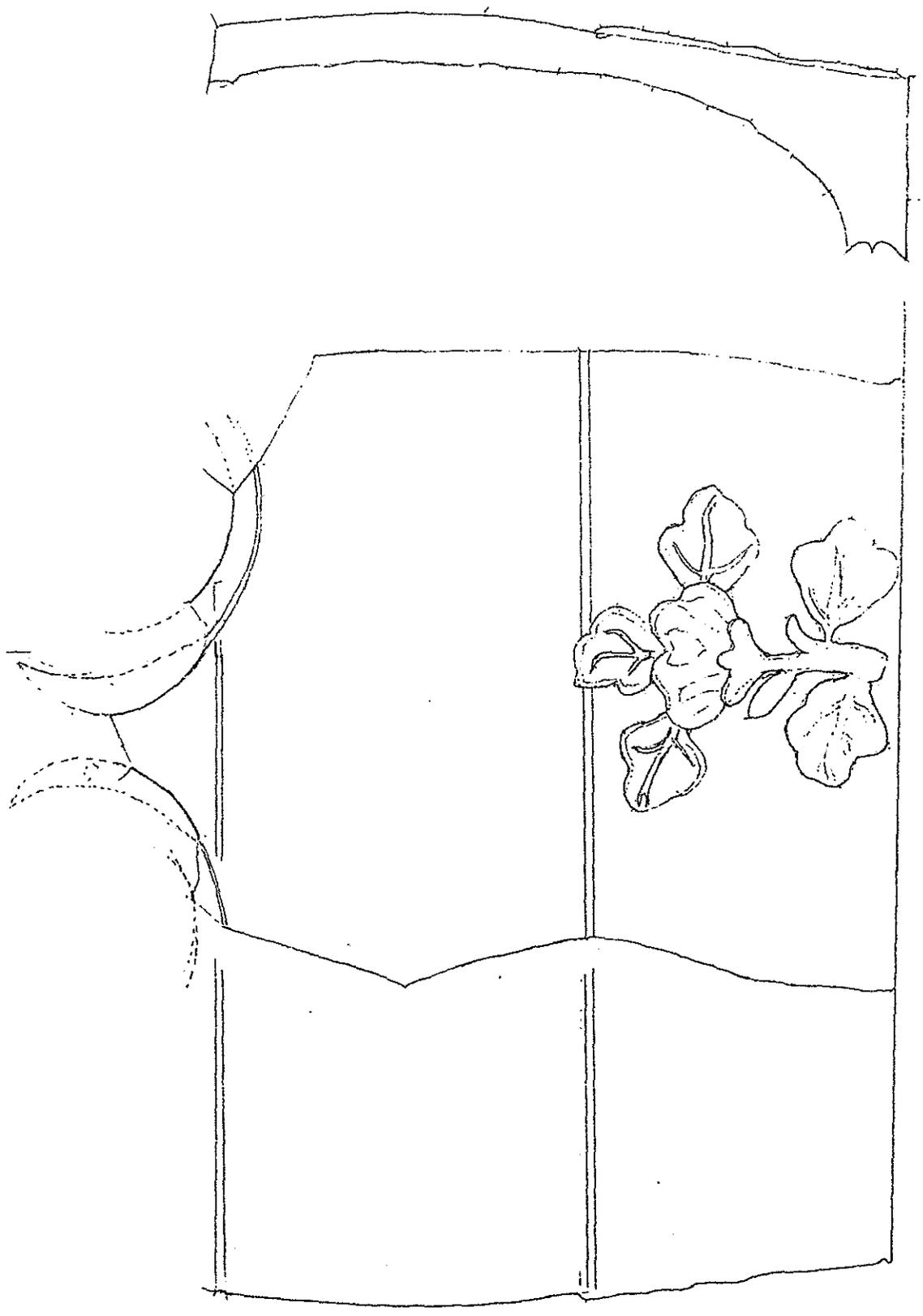
金属製品では、土塋16から帯金具(丸柄)が出土した。

まとめ

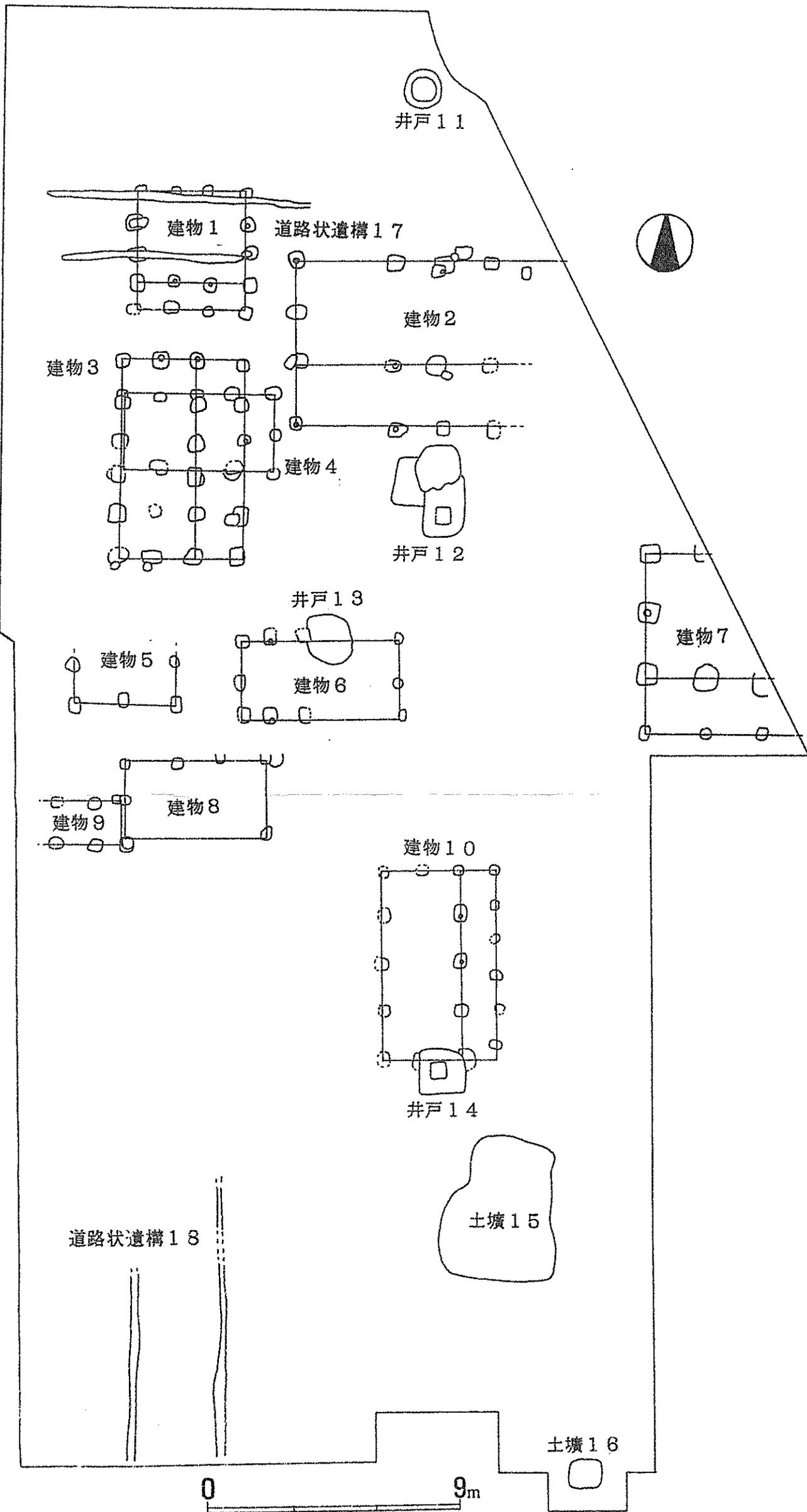
当該地については、当初、長屋王邸に匹敵するような貴族の邸宅跡とする見方が多かった。事実、調査区の東300mは長屋王邸、南東200mのNTT敷地内では、別の邸宅の庭園遺構が発見されている。ところが今回の遺構は、七坪の中心部を調査したにも関わらず、建物規模が小さく、数も少ない。建て替えも頻繁ではない。上級貴族の邸宅とするには疑問が多い。対して、2時期のいずれもが東西棟の主殿と、南北棟の脇殿の構成で、官衙的な機能を想定するに有利である。奈良時代の当該地区の具体的な様相を直接示す史料は残されていないが、平安京ではここに大学寮のあったことがわかっている。平城京では今回の調査区である左京三条一坊七坪・八坪に比定する説と、右京三条一坊七坪・八坪説の2説がある。いまのところ本遺構を奈良時代の大学寮とする積極的な根拠は見いだせないが、今後、大学寮の可能性を含めて当該地の性格の検討を深めていきたい。



調査位置図



貼花文火舎状土器実測図



調査遺構図